14. 朝河正澄の書幅の翻刻

亜米利加に留学し居我か子貫一の許より桜花をおこされけれは

いほへなみたちへたてたる　にしのかた海原遠きことくにゝ　もの学ひ居るおのか子は　いかにあるらむ　帰り行くかりにもつてをたのむへき　よすかあらねは　おきつなミたちかへる日を　ゆひ折りて待ちつゝあれハ　ゆくりなくけふにも文そ届きぬる　つゝかなきてふおとつれを　よミつゝゆけはさゝやかに　包ミし物の出てぬるを　開きて見れはおもひきや　桜の花の三つ二つ　すきにし春の匂ひさへ　色さへあせすありぬれは　そも此花はあめりかの　国に咲きしを　かねて我か　めつるを知りてはる／＼と　おくりこしけむ　わたつ海の八重のしほ路をへたてぬる　我か日の本に居なからに見るそうれしき親をおもふ　我か子のふかきこゝろおもひは

おくられし　花の香よりもおくりぬる

人のなさけの　ふかくもあるかな　　正澄

（早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成）

15. 貫一の第一回帰朝と正澄の死、立子山訪問

1906年(明治39年)2月16日、横浜港に到着。父と再会。

3月1日、郡山へ。3月2日、二本松へ。

3月5日、福島公会堂で講演。聴衆は約500人。角田柳作も出席。

このときの貫一の行動については、当時の『福島民報』に記事がある。

同年9月20日、正澄が腸ねん転により61歳で死去。真行寺の向山墓地に埋葬。

貫一は三日、七日の供養を済ませ、立子山村を訪問。天正寺に一泊する。

翌日、立子山小学校講堂で「朝河博士帰朝大歓迎会」が開催され、貫一が演説を行う。ダートマスやイェールの大学生のことや日露戦争を語る。

東京専門学校で英語の講師を務め、イェールから依頼された図書蒐集を行う。

1907年8月7日、横浜港よりアメリカに帰る。

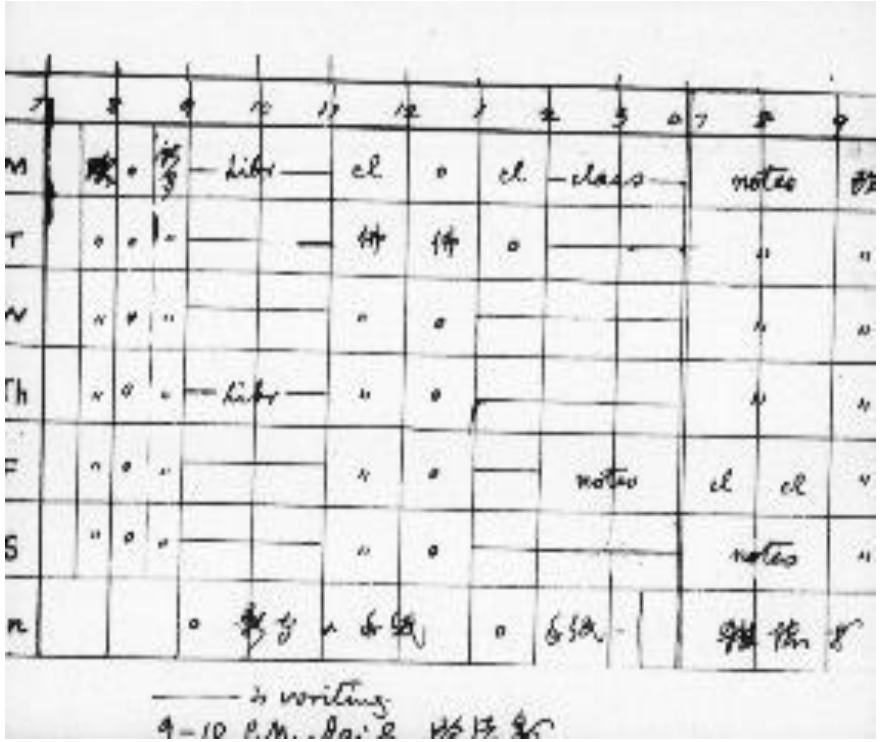
16. 立子山村の優良村表彰

朝倉鉄蔵---朝河正澄の後援者。河野広中に師事。自由民権運動に関わる。伊達・信夫・安達３郡の輸出用生糸の集荷と品質管理のための福島共同荷造所設立に尽力。1900 年 (明治 33 年)4 月、立子山村長に就任。村の改良に着手。伊達郡茂庭村から船尾與一を登用し助役とし、朝河校長と三人で自治の振興、産業の奨励、 経済の立て直しを始める。節約貯蓄と互助のために「立子山村有終社」を設立。青年男女の修養研鑽のための「徳成会」の設立。 1903 年に衆議院議員に立候補し当選。

立子山村は、1910 年 (明治 43 年)2 月 25 日に選奨 29 箇町村の一つとなり、内務大臣平田東助の名をもって 以下の表彰を受ける。

「福島県伊達郡立子山村　協同輯睦率ヰテ克ク公共ノ事ニ謁クシ整理経営共ニ見ルヘキモノ少カラス 今後尚一層ノ奮励ヲ以テ互ニ相協力シ益々其ノ実績ヲ挙グヘシ　茲ニ金五百円ヲ授与ス」

17. 正澄から貫一が学んだもの―研究への精進



(1925年2月頃の日記に書かれた日課表)

月曜の欄

７時30分-8時⇒欧

8時-8時30分⇒朝食

8時30分から9時⇒雑多

9時から11時⇒writing at library

11時から12時⇒class

12時から13時⇒休憩

13時から16時⇒class

16時から19時⇒休憩

19時から21時⇒notes

21時から22時⇒欧法書

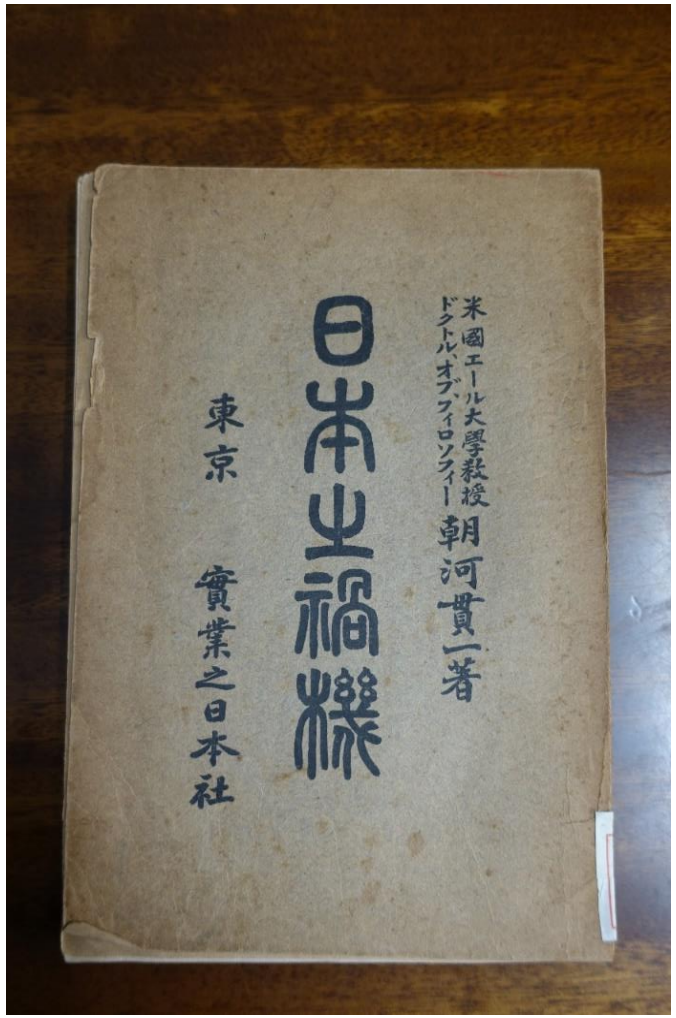
- 月曜から土曜にまで日々10時間の研究
- 日曜は9時朝食、手紙と雑読の日

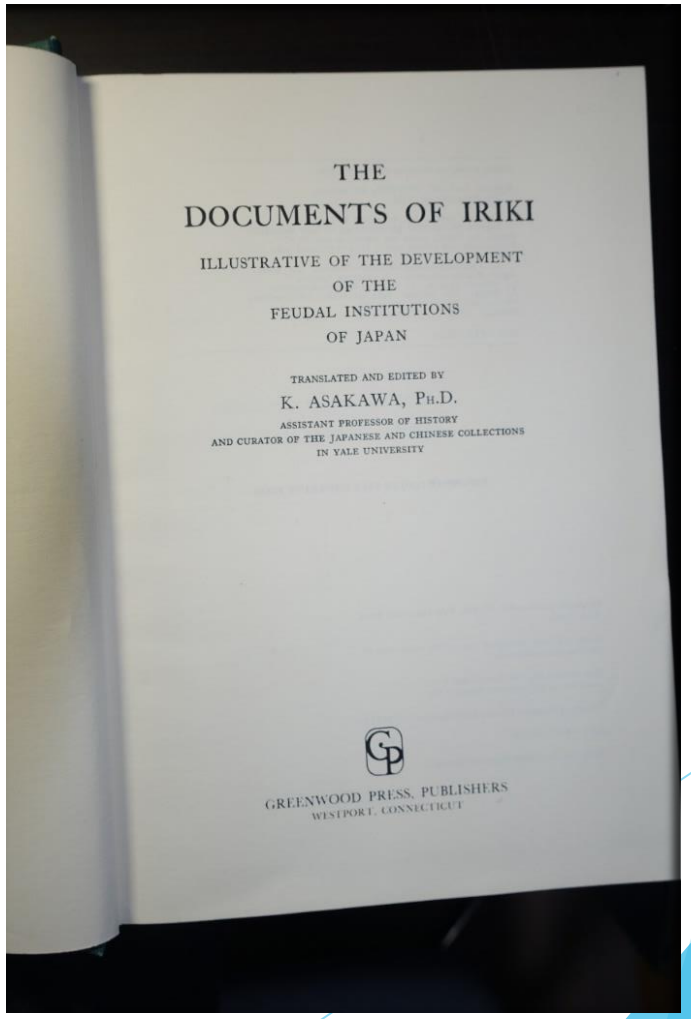
18. 正澄から貫一が学んだもの―祖国日本への「報恩」

1900年の「年頭の自戒」

「私の人生の大部分は、以下の人びとが与えて下さった礎石の上に築かれてきた。
横井時雄、渡瀬常吉、徳富蘇峰、渡辺熊之介、高橋春吉、中桐確太郎、坪内逍遙、
勝海舟、大隈重信。これらの人びとのほかに、私の若い友人や親戚の人たちも
加えられねばならない。順序こそ最後になったが、恩義をこうむること最大の人物
として、わが両親とタッカー博士がいる。---
故郷からこの異郷にやってきて、人類史上における日本の相対的な地位を知った
ことと、歴史学研究によって日本に報恩しようと決意した---。
私が現在考えている目的は、西洋に向かって東洋をただ解説するというよりも、
むしろ全人類の生存と運命の真相に対する組織的貢献にある---。」

19. 朝河貫一の著作
―『日本之禍機』(1909年)と『入来文書』(1929年)―





20. 朝河貫一の業績

(1)Historian(歴史家)

日本の封建制の研究、日欧比較封建制論の研究で欧米の歴史学界で高く評価。

『入来文書(The Documents of Iriki,1929)』の英語での出版。

フランスのマルク・ブロックがとくに評価。欧米の日本史研究の基礎を作る。

(2)Curator(東アジア図書部長)

イェール大学で日本・中国関係の図書の収集作業を行う。とくに日本研究の基礎資料を集めた。

(3)Peace Advocate(平和の提唱者)

日本やアメリカの知識人に多くの書簡を送り、日本の国際的な孤立に警鐘を鳴らし続ける。『日本之禍機』の出版。日米開戦を「天皇宛大統領親書」により阻止しようとした。

おわりに – 正澄から貫一へ

(1) 正澄は砲術の専門家にして能筆家、優れた文才の持ち主。貫一の文才は正澄の教育の賜物。また「朝河天神」と呼ばれた正澄の克己の精神を受け継ぐ。

(2) 正澄は身を粉にして立子山村のために尽力。二本松藩の「戒石銘」の精神の実現。「戒石銘」---「下民は虐げ易きも上天は欺き難し」。正澄から学んだ二本松藩の精神の継承。貫一は、日本が軍部独裁により、存亡の危機にある事態にに対し、痛烈な批判と戦争回避への努力を行う。

(3) 立子山の重要性---立子山は養蚕が盛んで繭、生糸、羽二重の特産地。優良村となった立子山村で育った経験が、貫一の歴史研究に影響を与えた可能性。